

大学がスポーツで子供たちを笑顔に
～未来のオリンピックスターを発掘～

大阪経済大学 田島ゼミⅡ

東口 良祐 東野 良太 馬場 翔希 飯田 行哉
西岡 知哉 江畑 司 郁 泰幸

1. 問題の所在

1-1. 子供のスポーツ環境

現在、日本における子供たちのスポーツ離れが目立っており（表 1）、子供たちの体力は低下が指摘され問題視されている。iPhone、パソコン、ゲーム機の普及に伴って家の外に出なくても友達同士で遊べることができ、レクリエーションやスポーツ以外の娯楽が増えたことも原因のひとつだと考える。私たちは、子供たちにとってスポーツが、多様化した娯楽にも負けない魅力的な存在にしていく必要がある。

一方で、真剣にスポーツに取り組み、オリンピックや全国大会を目指す子供たちもたくさんいる。その中でも、近所にトレーニング施設が無いなどをはじめ、指導者を含めた環境面の改善すべき問題が多い。

以上の通り、現在の子供のスポーツ環境は「スポーツに触れる機会を持たない子」と「スポーツを極めるための環境を求める子」に 2 極化しているという問題があると考えた。

表 1. 身長基礎的運動能力の比較

	男子		女子	
	親の世代	今の子ども達	親の世代	今の子ども達
身長 (cm)	143.2	145.43(↑1.9)	145.5	147.3(↑1.8)
50m走 (秒)	8.8	8.8(0.0)	9	9.2(0.2遅い)
ソフトボール投げ (m)	34	27.2(↓6.8)	20.5	16.5(↓4.0)

出典：子供の体力向上 HP より修正

1-2. 大学および大学スポーツの現状

日本の 18 歳人口の減少は早いペースで進んでおり、1992 年の 205 万人から 2025 年には 109 万人（リクルート「カレッジマネジメント」175 号）になると予測されている。そのような状況の中、文部科学省は今後の大学のあり方について再構築することを求め、①大学教育の質的転換と大学入試改革 ②グローバルに対応した人材育成 ③地域再生の核となる大学づくり ④研究力強化 などについてビジョンを策定することを求めている。例

例えば、今回企画対象とした大阪経済大学の場合、大学として特に③地域再生の核となる大学づくりについての取り組みが重要になってくると考えている。

また、スポーツと大学との関わり合いにおいても、地域スポーツとトップスポーツの間で好循環を生むための施策が展開されており、その実現のために研究資源や多様なスポーツ施設、指導者を持つ大学は、大きな役割を果たせると考えたことが、本企画を提案するきっかけであった。

2. 企画のコンセプトと具体的な内容

2-1. 運動・スポーツの機会が少ない子どもに向けて

1) 企画コンセプト

a) スポーツの楽しさを知ってもらうために、スポーツが苦手でも楽しめる種目を開発あるいは普及する。

b) 運動・スポーツとの接点を持つ場を増やしていく。



出典：世界ゆるスポーツ協会 HP



出典：日本ティーボール協会 HP

2) 企画内容

a) スポーツが苦手でも楽しめる種目を開発, あるいは普及するプログラム

世界ゆるスポーツ協会が開発した「ハンドソープボール」や日本ティーボール協会が普及を進める「ティーボール」、その他「フラッグフット」「ソフトバレーボール」「タグラグビー」など、ケガの心配が少ない（痛くない）、上手な子と苦手な子が一緒にプレイしても、お互いが楽しむことのできる種目を展開する。

b) 運動・スポーツとの接点を持つ場を増やす方法

運動・スポーツが苦手な子どもたちが、スポーツに関わるイベントやスクールに自ら参加してくれることは少ないと考えているので、学童保育などと連携をとって、スタッフの大学生が子どもたちのいる場に出かけて、プログラムを展開する方法も実施する。

2-2. その種目が好きな子 から スポーツが好きな子どもへ

1) 企画コンセプト

日本のスポーツは一人単一種目のスポーツが主流であり、海外では一人で多種目のスポーツを楽しむという傾向がある。日本では中学・高校になると部活動という文化がある。そのタイミングでは基本的に1種目のみのスポーツを選ぶことが多い。私たちは種目文化からスポーツ文化の普及を目指して、複数種目のスポーツを楽しめる環境をつくりたい。大阪経済大学でも現在33の体育部が活動を行っており、施設、指導者など複数のスポーツ種目のプログラムを提供しやすい環境にあると考えた。

2) 企画内容

考えたプログラムのうち、2つを以下にまとめた。

a) 中学の部 ～多種目を体験する機会～

スポーツ庁の運動部活動に関するガイドライン（指針）によると、中学の部活動には週に2日の休養が望ましいとの提言がある。その休みのうち1日を他のスポーツ種目を体験し、他の中学校の生徒と交流する機会として、中学の部活にない運動種目の教室を開催する。（開催予定：硬式テニス、アメリカンフットボール、ラグビー、ラクロス）

b) 小学の部 ～かけっこ教室の開催～

野球、サッカー、バスケットボールなど、将来どのようなスポーツ種目を専門に行う場合でも、「走る」「跳ぶ」「投げる」という運動の基本動作は必要になってくる。そこで、小学生に対しては、どんなスポーツに進んでも活躍できるような陸上教室を展開する。小学1～2年、3～4年、5～6年にそれぞれクラスを分けて。体格やレベルに応じたプログラムを提供する。例えば、普段は野球チームに所属しているが、基礎体力や「もっと足を速くしたい」というニーズに対応できるものを目指す。

2-3. 競技力を高める一貫指導システム

1) 企画コンセプト

ここでは、将来オリンピックで活躍できるような選手の育成を考えている。種目の選定は、学校部活動であまりない種目や、大阪経済大学（大阪市東淀川区）の近辺でスクールやチームがあまり存在しない種目のうち、大学の体育部（施設、指導者、熱心に取り組む学生）として、活動しているクラブを選び、一貫指導体制で選手を育成する。

2) 企画内容

a) 対象種目

ラクロス、アイススケート、競技スキー、ラグビー

b) 対象学年

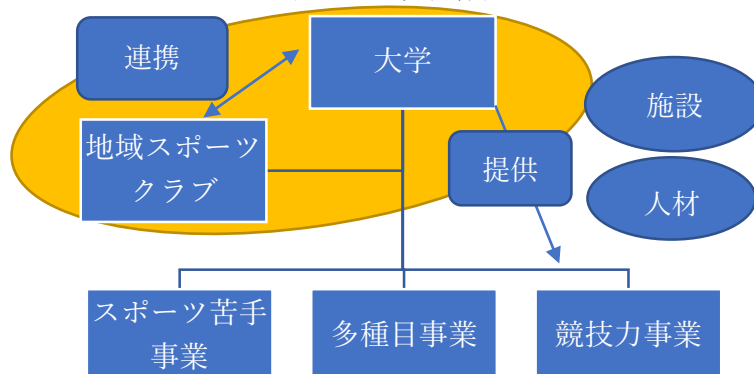
- ・小学4～6年生クラス（メジャー、マイナー）
- ・中学生クラス（選抜クラス）

c) 特徴（差別化ポイント）

- ・比較的競争が少ない種目なので、トップが狙いやすい。
- ・小学校、中学校の一貫指導を行うことで、長期的な育成を行うことができる。
- ・専用の施設等の環境問題は、大学の施設や指導者によって解決が可能である。

3. マネジメント

図1. 運営組織図



《マネジメントのポイント》

（指導）

施設：大学スポーツ施設を活用

指導：現場での指導はその部活の運動部員が担当する

※学生指導者は、将来教員を目指す学生やスポーツ指導を目指す学生を中心に選出

※指導内容の監修はその部活の指導者が行い、2-3の指導は主に指導者が行う

（運営）

プログラムの企画：大学だけでなく、NPO等の地域スポーツクラブと連携して開発

※大学の実習系授業としてスポーツマネジメントを学ぶ学生が実習として参加、単位化募集、会計：NPO等の地域スポーツクラブ

※以上のように、運営に関しては大学が直接行うのではなく、地域のスポーツクラブと連携することで、相乗効果を出す。

<主な参考文献>

文部科学省「子どもの体力の低下の原因」最終閲覧日 2018/10/3

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gjjiroku/attach/1344534.htm